●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 14

14th Letter

信長塀伝説

運命の桶狭間で勝利
そのお礼として奉納

戦術の豪放磊落ぶりから、一般に唯我独尊として知られ、比叡山の焼き討ちなど神社仏閣を毛嫌いしているイメージのある信長ですが、歴史を詳しく調べていくと、信長がめざしていたのは「寺社勢力の武装解除」だったことが分かります。さらには、「楽市・楽座」や「関所の撤廃」などの政策が功を奏し、庶民に支持されたことで、天下統一目前までいきました。しかし、家臣の明智光秀の謀反により志半ばで討たれましたが、その思想は秀吉、家康へと受け継がれていきました。

時は永禄3年（1560年）5月19日未明、信長は今川軍討伐のため桶狭間出陣の準備に入ります。甲冑に身を固め、立ったまま茶漬けをかきこみ、幸若の「敦盛」を三度舞います。「人間五十年、化天の内にくらぶれば夢幻のごとくなり」で始まる謡に合わせて信長が舞う、時代劇でもお馴染みの名シーンです。男信長が一世一代の勝負を前に自分自身を奮い立たせるために、勝利を思い描いてイメージトレーニングしながら勇壮に舞った「花の宴」だったのかもしれません。

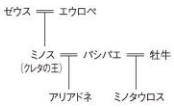
この後、信長は馬に跨っていざ出陣。必勝祈願のため熱田神宮に着いたのは朝8時頃です。奇襲作戦が功を奏し、信長軍が今川軍を破ったのは周知の通りですが、どう見ても勝ち目のなかった戦いに勝利できたのは神のおかげと、その戦勝のお礼に熱田神宮に塀を寄進しました。これが信長塀で、今も熱田神宮境内の第三鳥居手前東西にその一部が残っています。

土と石灰を油で練り固めたもので、瓦を一枚ずつ何層にも積み重ねて築いたこの塀は、文字通り信長の神様への感謝の気持ちで練り固めたともいえます。ちなみに、三十三間堂の太閤塀、西宮神社の大練塀と並んで日本三大練塀と称されています。

また、元亀2年（1571年）には信長は熱田神宮の海蔵門の修理も行っています。その時にこの門は楼門形式から八脚門に改められましたが、昭和20年（1945年）3月の戦災によって焼失、今はただ礎石を残すのみとなっています。

感謝すればツイてる
「長く信じる」信長

ギリシャ神話では、神様にお礼をしなかったことでバチがあたる話があります。ミノタウロスの話がそれ。ミノス王は、ゼウスとエウロペの息子でクレタ島の王。ちなみに、エウロペにちなんで名づけられたのがヨーロッパです。



ミノス王はポセイドンに牡牛の生けにえを捧げる約束で国王の座に就いたのにかかわらず、牡牛が惜しくなり約束を守らなかったせいで、怒ったポセイドンから妻パシパエ（太陽神ヘリオスの娘）が呪いをかけられてしまいます。なんとその牡牛を愛してしまったのです。

しかし、いくら恋い焦がれようと牡牛がパシパエを相手にしません。そこで、王宮お抱えの大工・ダイダロス（イカロスの父）に頼んで牝牛の張り子をつくってもらい、パシパエは張り子の中に入って牡牛と交わり、頭が牛で体が人間という怪物・ミノタウロスが誕生します。ミノタウロスは、ダイダロスがつくったクノッソス宮殿の迷宮に閉じ込められましたが、ミノタウロス退治のために立ち上がったアテネの王子・テセウスがミノス王の娘・アリアドネの手助けにより見事退治することになります。

実は、迷宮をつくった張本人のダイダロスもミノス王を侮辱したとして、息子のイカロスともども迷宮に閉じ込められてしまうことになります（テセウスとアリアドネのエピソードの詳細はSHINWA WALK ⑩、ダイダロスとイカロスのエピソードの詳細はSHINWA WALK ①をそれぞれ参照してください）。

「ありがとう」と感謝し、その感謝の気持ちとして神様にお礼をする。「ツイてる、ツイてる」と唱えていると、ツイてることが本当に起こります。信長がツイてたのは、感謝の気持ちがあったからに違いありません。信長塀からは、「信心深さ」という信長の意外な一面が垣間見えます。でも、実はそれが信長の本来の姿なのかもしれません。神を「長く信じる」と書いて信長なのですから。

▲ 第三鳥居手前東西に今も残っている信長塀。

※次回は、桶狭間周辺に伝わる桶狭間合戦伝説をお送りします。お楽しみに。

■ 写真／Kiyoshi K　■ イラスト／Rei　■ 取材・文／Icarus